

1. はじめに

1.1 研究の背景

(1) 今、現在の住宅

私たちが住んでいる住宅は、近代に供給された労働者住宅と同じ住宅だ。その住宅は、可変性がない、家族とのつながりが薄くなっている、個人化してきているということが言われたが、最近では住宅の内側の空間は改良されてきている。では、外との空間はどのようにして取り入れられるのかと思いつつ今後のあたらしいすまいを考えたいと思った。

(2) 住宅の歴史から今後のあたらしいすまいを考える

今後のあたらしいすまいを考える際に、山本理頭の「住宅の起源から考える」という論文は私にとって誘発することが多かった。そこで、この山本論文にそってすまいの変遷をみることにより今後のあたらしいすまいの方向について考える。

1.2 研究の目的

本研究は、住宅の歴史からすまい空間の意味・あり方の変遷を知り、近代の住宅すまいの課題を整理して、これからのあたらしいすまいの方向を提案することを目的とする。

1.3 研究の構成

研究の構成は、木村草太の「いま<日本>を考えるということ」という本の、山本理頭の「住宅の起源から考える」「1933-2016」の2つの論文から、住宅の歴史を知り、これからのあたらしいすまいの基本的な考え方を提示する。

2. 住宅の歴史

2.1 古代ギリシアの住宅の空間

(1) 住居にとって重要なもの

山本(2016, A)は、古代ギリシアの住居にとって重要なものについて以下のように述べている。

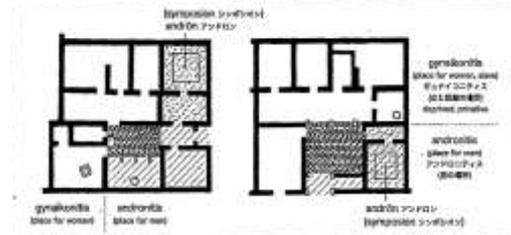
古代ギリシアの都市ポリスの住居には門構えが重要だと言われており、門構えは、公的領域と私的領域とを分ける境界だった。また、公的領域と私的領域の間にある空間を「無人地帯」と言う。

(2) アンドロニティスとギュナイコニティス

山本(2016, A)は、アンドロニティスとギュナイコニティスについて以下のように述べている。

古代ギリシアでは、植民都市の一つであるオリュントスがある。そこの住居ではアンドロンと呼ばれる客間がありアンドロンは、男たちが飲んで食べて議論する政治的空間だった。「男の場所」という意味がある「アンドロニティス」、女の場所という意味がある「ギュナイコニティス」があり、この「男の場所」が「無人地帯」である。

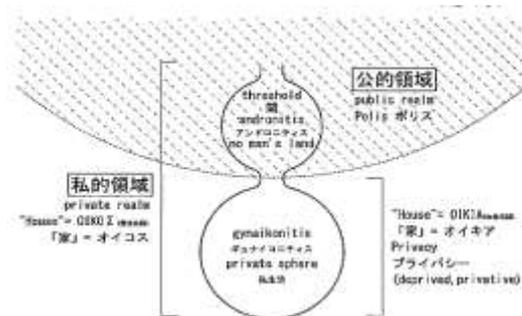
図1.オリュントスの2軒の標準住宅平面図



(3) 「閾」

山本(2016, A)は、「閾」について私自身は、男の場所であるアンドロニティスのような空間のことを「閾」と呼んでいます。英語で threshold です。「閾」とは二つの異なる領域の間であって、その相互の関係を結びつけると同時に、切り離すための空間です。都市という公的領域と家族という私的領域の間であって、その二つの領域を相互に結びつけ、あるいは切り離すための建築的な装置が「閾」ということとなります。

図2.「閾」の概念図



2.2 近代からの住宅の変化

(1) 近代建築国際会議(CIAM)の内容

山本(2016, B)は、近代建築国際会議(CIAM)の内容について以下のように述べている。

CIAM 第一回会議はオープニング・セレモニーのようなものだった。第二回会議のテーマは「最小限住宅」、第三回会議は「集合住宅」、第四回会議は「機能的都市」だった。それぞれ理想とされていたことは、健康な生活、住人の平等、健康な都市であったという。まとめると表1のとおりである。

表1. 近代建築国際会議(CIAM)の内容

CIAM 第一回会議	オープニング・セレモニー	
CIAM 第二回会議	「最小限住宅」	→ 健康な生活
CIAM 第三回会議	「集合住宅計画」	→ 住人の平等
CIAM 第四回会議	「機能的都市」	→ 健康な都市

(2) アテネ憲章が採択

議論の集大成としてCIAM 第四回会議の時に採択されたのが「アテネ憲章」だった。山本(2016, B)は、アテネ憲章の採択について「機能的都市」におけるその中心課題が「健

康」であった所以である。「国民の健康」は当時、建築家たちの強い思いだったのである。そしてそれは建築家たちにとってだけではなく、最も重要な国家的課題だったのであるという。さらに山本(2016, B)は、第二次世界大戦後の日本の都市計画、住宅計画も同様にここから大きな影響を受けているという。

(3) CIAM 第二回会議(最小限住宅)

山本(2016, B)は、CIAM 第二回会議(最小限住宅)について以下のように述べている。

一つの住宅に一つの家族が住む、それが理想とされ、その家族のためのプライバシー、両親と子供のプライバシーはどのように守られるべきか、「1 住宅=1 家族」という住み方が求められるべき住み方であると言われたのだという。

「1 住宅=1 家族」は、古代ギリシアであった公的領域を含む住宅ではなく、プライバシーだけを守る、公的空間がない住宅である。

(4) 労働者住宅の供給

山本(2016, A)は、労働者住宅の供給について以下のように述べている。

労働者住宅は、19 世紀に労働者たちが暴動を起こした影響で供給し始めた住宅だ。特徴としては、一つの家族が一つの住宅に収容され、労働者たちが互いに出会わないように、相互に隔離されたような形式である。

2.3 旧二重構造から新二重構造へ変化

木村(2016)は、家族の旧二重構造[「いろいろ端のある家」=「家」家族/「茶の間のある家」=「家庭」家族]から新二重構造[「リビングのある家」=「家庭」家族/「ワンルーム」=個人]への転換という構図があるという。

これは、旧二重構造は、農家・町家、新二重構造は、公営住宅にあたる。この住宅の変化を西山の論文^{34 5}を参考に引用すると表 2 のとおりである。

表 2. 住宅の変化

1. 農家
<p>明治のはじめ三、三〇〇万の日本人の八割以上は農民であった。その一つ前の封建時代には、武士階級とこれに従属して城下町に住んでいたごく少数の商工業者・町人や神官・僧侶などをのぞくと大部分の国民は農民であり、さらにさかのぼって原始時代までいくと、ひとにぎりの支配者をのぞいては、すべて日本人は農民であった。</p> <p>したがって農家住宅は日本のすまいの原型といえる。</p> <p>日本の伝統的な農家の代表的な間取りを示せといわれれば、平入りの田の字型を挙げることができよう。内部空間は大きく土間(ニワ)と床上(オイエ)とに分かれており、土間の前に入口がある。入口の片方にマヤがあり、奥の方にはカマド(クド、ヘツツイ)がすえられている。床の上は大きくタテ・ヨコに十字に間仕切られ、四つの室が田の字形に並んでいる。田の字型とも四つ間型、四間取りなどともいわれる。</p>
2. 町家
<p>ながい間、都市では住宅や建築は「街路」という都市の骨組みを基準にし、それにくっついてつくられてきた。ミチにならんでいる住宅——それが「都市住宅」の源流である。「町家」という住宅の型は、そういうものとして発達してきた。</p> <p>やがて商業がさかんとなり、人びとが集まり住むようになってくる平安時代の後期には、道に面してその区画はさらにこまかく割られ、道ぞいに軒と軒、妻と妻とを接して住宅がつくられるようになってきた。両側がとざされ、前は街路、後は裏庭に開いている町家の原形ができてくる。</p> <p>はじめは商売は定められた官営の市場でしかできないことになっていたが、高窓のあたりに台をつけてものをならべるところからはじめて、やがて見世台を外につくり出し、すまいの前の部分全体をミセにする商人の住宅がうまれてくる。</p>
3. 公営住宅(五一C型を中心に)
<p>公団のDK型アパートの原型は、一九四八年以来つかさねられてきた戦後の鉄筋アパートの設計の経験と、戦前の住宅平面研究を集約して、建設者住宅局の主宰による標準設計委員会がまとめた一九五一年の公営住宅標準設計「五一C型」である。これは、わずか一〇・七坪の広さの中に、食糧分離と就寝室分離とを追求してつくられた六帖・四帖半の寝室と三帖敷きほどの板張りスペースをもった炊事場、つまりDKとできていた。いわゆる二DKのプランである。当時すでに一般の小住宅に、そうしたダイニング・キッチン的な設計や住み方が実際に採用されつつあった状況をふまえて、これは提案されたのであった。</p>

3. あたらしいすまい

あたらしいすまいの基本的な方向は、以下のとおりである。

(1) 集まって住むって楽しいな

労働者住宅のような相互に隔離されている住宅、プライバシーだけを守る住宅ではないすまい方とする。

私たちの住んでいる住宅はこの労働者住宅と変わらない。プライバシーだけを守り、外との関係を断ち切るのではなく、外とのコミュニケーションをとること。

そこで、古代ギリシアのアンドロンの男たちが飲んで食べて議論する空間を取り入れる。アンドロンでは男たちだけだったが、この提案はそこに住んでいる人たちが何気なく集まり、家族だけのための住宅だけではなく、みんなで集まって日々を暮らすことができるすまいとする。

(2) レトロフューチャーな住宅づくり

大谷(2015)は、レトロフューチャーについて『レトロフューチャーとは、「なつかしい未来」という意味で使われる。レトロといっても、決して「懐古趣味」ではなく、フューチャーは、モダニズムを超えた人間的な未来を構築することである。資本主義社会システムが終焉を迎えている時代の転換期である今、真の豊かさを取り戻した人間的な未来への希求が模索されている』という。

近代では、古代ギリシアの空間がなくなり、プライバシーを守るためだけの住宅になっている。プライバシーだけの住宅ではなく、農家の田の字型をつかい空間を開け、プライバシーがほしい場所にはそのような場所を設ける。

この考えから、昔のものをそのまま使うのではなく、現代にあったつくり、現代の生活にあったつくりにし「なつかしい未来」を感じさせるようなすまいづくりにする。

(3) まちの縁側づくり

古代ギリシアの住宅にあった「男の場所」、町家のようにミチに並び見世を出したりして公的領域をもっていた住宅等があった。

縁側は外とのコミュニケーションをとることができる空間である。つまり公的領域をもつ空間である。

まちの縁側づくりとは、そのような公的領域をもつ場所をつくるという考えである。縁側をつくるのではなく、縁側のような公的領域をもつ空間をつくることを意味する。

例として、町家のようにミチ沿いに縁側をつくることを考える。そうすることにより人とのコミュニケーションがとれ公的空間をもつようになる。そして、開かれた空間を取り戻すことができると考える。

【参考文献】

- 大谷英人, 2015, 引き算のまちづくり, 日本建築学会四国支部研究報告集第 15 号, 一般社団法人日本建築学会四国支部, p163~p164
- 木村草太, 2016, シンポジウム, いま、日本を考えるとということ, 木村草太【編著】, p11~p15
- 西山卯三, 1975, 日本のすまい I
- 西山卯三, 1976, 日本のすまい II
- 西山卯三, 1980, 日本のすまい III
- 山本理顕, 2016, A 住宅の起源から考える, いま、日本を考えるとということ, 木村草太【編著】, p18~p39
- 山本理顕, 2016, B1933-2016, いま、日本を考えるとということ, 木村草太【編著】, p114~p139